

“道文化政策にももの申す、”

——比較文化の視点から——

遠藤 ミマン

美術館の庭に彫刻をいっぱい

1,200万の調査費がついて、ようやく道立美術館の計画が進んでいることをある雑誌で知った。

鉄筋コンクリート地下1、地上3階、延べ1万平方メートルのうち、展示室の広さ3,300㎡、総工費当初予算18億円が、10億円に減額された。(減額は残念だなあ)

場所は北1西17の空地、道有地19,473㎡、広大な知事公館の緑地帯とならんで、美術館としては格好の場所。そして美術館の壁面を——道内はじめ世界の若人、いや大人たちもまじえての手型で埋めるアイデアを取り入れる——とかのこと。この手型が、美術館の全体設計にマッチするなら、これも大いにけっこう。

さて、わたしの願いは、建物だけでなく、敷地全体の緑地プランの中に、彫刻をたくさん使ってほしいことだ。

わたしは2度、ヨーロッパ、アフリカの美術館めぐりをしたが、館内の彫刻作品は勿論だが、建物に彫刻はつきもの、広場にも彫刻あり、公園にもたくさんある。とにかく子供の時から彫刻を見なれるどころか、手でさわり、馬乗りになって親しんでいる。子供に乗られたくないものは台座をつけて高くし、偉い人ならポールの上に高く飾ってある。親しむ彫刻、鑑賞する彫刻、装飾の彫刻、記念の彫刻などいっぱいだ。

日本の美術館は彫刻が割りと少なく、街の中でも数える位しかない。せめて美術館の庭に彫刻がほしい。南の宇部市に彫刻公園あり、北海道の道立美術館には、ユニークな彫刻の庭があるとまでいきたいものだ。

たしかアムステルダムの市立美術館だったと思う。館の内部から外を見ると、いろいろな彫刻が芝生に置いてある。適当に樹木があって日かげがあり、小さな池があり、小さな砂場もある。砂場には、パンツひとつの幼児たちが砂遊びをしている。母親はベンチに腰をかけ日光浴を楽しんでいる。喫茶コーナーでコーヒーを飲んでいることもある。わたしは平和で楽しいこの彫刻のある庭が気に入った。館の外に出てこの庭を歩いて見る。彫刻は芝生から、ニョッキ、ニョッキと突っただっている。庭の奥の方に行くと、木の根っ株のような彫刻があって、今しも一人の彫刻家が塗料のぬりかえをしているところだった。

生活の中にとけ、風景にとけこんだ彫刻のある庭がほしいな。

北海道の自然を守ろう

所はトマコマイの駅前の喫茶店で、バスを待つ間のコーヒーを飲んでた。卓上に小型のスケッチブック



クがある。書きたいことを書くらくがき帳だった。その中に、5月の休日を利用した本州の若ものたちの旅の感想がたくさん書いてある。

「三泊四日の旅、雄大な北海道、生きていることのすばらしさ、是非もう一度来たい。」

「北海道はぼくのあこがれの土地、素朴で雄大で、すばらしい一事につきる。」

「こんなに美人が多いとは知らなかった。東北・北海道にかけて一番美人が多いなあ!」

など、北海道の自然と美人讚美の声は嬉しい。

亡くなった田辺さんも、北海道の風景を愛した人だった。数年前の初夏の雨の日、富貴堂でぼったり会った。

「写生にきましたか、あいにくの雨で…。」

「先生なら北海道の風景がすっかり頭に入っているんじゃないですか。」

「いや、やっぱり自然を見て感じなくちゃね。」

と、そんな会話を取り交したことを思い出す。いや、田辺さんばかりでなく、北海道内の作家は、みんな北海道の自然や人間を愛している。

ところが、近ごろ観光地はごみの山などと聞くと、ごみの集積、車の排気ガスの集積で北海道の大自然も消えてしまいそうな気がする。それに気がかりなのは、都市近郊の山野をブルで真っ平にする土地開発のやり方だ。

スイスの国を旅して驚くのは、山の相当の高さのところまで家を建てているが、地形を生かし、自然を傷つけない配慮をしている。日本じゃ、樹木を生かすような工夫をしない。これは、明治以来の北海道開発の先駆者が自然木を、ぼったぼった伐り倒して田畑を作った。そんな伝統の悪い面を受けついでいるのではないだろうか。

オランダの国は小さい。小さいが故に海中に土地をふやす努力をしている。その上、造成した土地には木を植え、第2の自然を作っていく。日本だって国が小さいんだ。どうして土地をふやす工夫をしないのだろうか。例えば、日軽金の赤泥投棄で陸地を造る話があったように聞くと、国土拡張の一つのヒントだ。考えたっていいじゃないか。

とにかく、この大北海道の自然を守ろう。育てよう。そんな政策が現実に出ないことには、魅力のある北海道も減んでしまうよ。